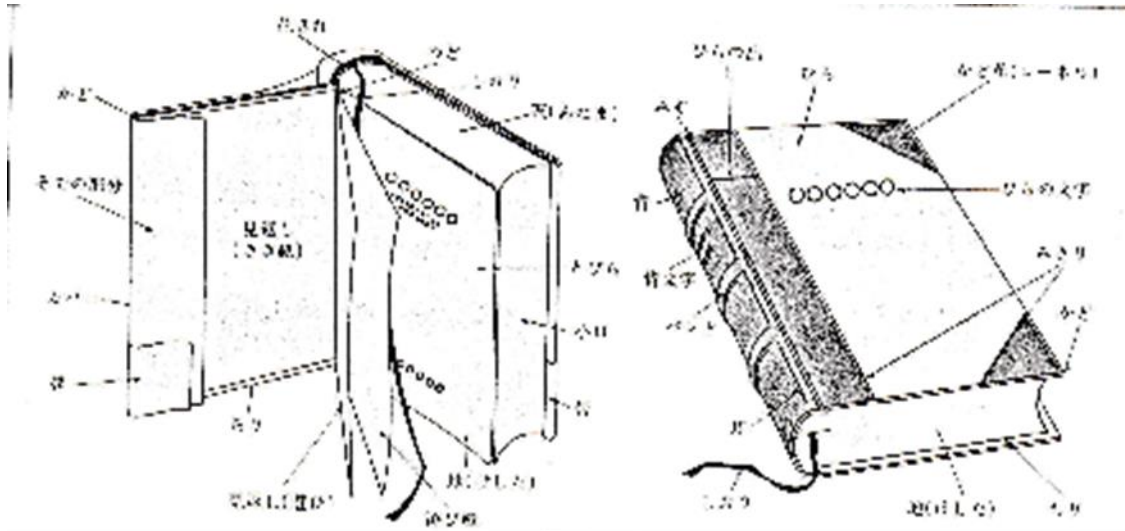


## ◆第19話◆ 自校史のかたち

自校史は、これまで「本」という形態をとることが通例であった。21世紀に入り、このかたちは、デジタルメディアを伴うようになる。「本」に「CD」や「DVD」が附録として添えられる自校史が見受けられるようになる。上智大学百年史は、ディスク1枚のみで完結したようである。また、『立命館大学百年史 資料編三』は、DVD仕様に製作途中で変更になっている。立命館大学の場合は、限界ページ数を超えたという事情がある。自校史に使用することが多い年史用紙は、薄くて強い特長があるが、堅牢な製本を保つために最大値1800頁（年史用紙使用の場合。束の幅8cm未満）をその限界ガイドラインとする。古い本には、2000頁の本を見かけることがあるが、丸背であるはずのものが角背のようになってしまっている。業界では、「背がもたない」という表現で、編綴頁の制限案内をしている。



自校史の体裁は、多くの場合、上製本（通称・ハードカバー）である。普及版や簡易版といわれるものは並製本（通称・ソフトカバー）である。かっこ書きに「通称」と入れた意味は、並製本だからといって柔らかい或いは紙のクロス（表紙の材料のこと）とは限らず、上製本といってビニール表紙がないわけではないということなのである。国語辞典など地券紙を使った上製本は、並製本のようにも見えるだろう。上製本と並製本の区別は、まず花布があるかないかで判断ができる。ちなみに、『西高の五十年』（東京都立西高等学校）は、糸かがり並製本である。

製本の形は、原則として上製本か並製本かということであり、どちらもケース（箱）に入れるか入れないかカバーが何であるか、という付属品を付けることによって出来上がりのイメージが変わるのである。編纂担当者の意見と金庫番との合意次第である。

上製本の場合、最近、糸かがりをせずアジロという方式で背固めすることがあるので、製本業者に一任するのか、本来の糸かがり上製本にするのか指定して発注すると間違いが少なくなる。上製本の注文で、注意すべきは、クロス材料を布クロスとするか書籍用クロス（布にも紙にも見える）とするかであろう。

織り目については、割愛する。

並製本は、上製本よりも指定が大変かもしれない。針金綴じ（平綴じ・中綴じ）、無線綴じ及びアジロという三通りの方法があり、値段が明らかに異なる。黙って並製本（或いはくるみ表紙）と指定した場合、製本業者は無線綴じを選択するかもしれない。これは、書籍としては、最悪の選択となる。無線綴じとアジロの大きな違いは、四方裁ちか三方裁ち化というところにある。四方裁ちすると、一枚一枚バラバラになる。三方裁ちのアジロは、バラバラにならず、上製本に近い強度を得られる。また、並製本でもスピン（しおり紐）は装着可能であることを申し添える。ここでは、あまり自校史に一般的でないという理由で針金綴じについては説明を割愛する。

さて、ここからは、データをまとめたデジタルメディアはさておき、本来の自校史である「本」について記していくことにする。

判型は、既に述べているので、ここでは割愛する。

自校史が編纂され始めたころは、創立からの年数が短かったこと、とにかく本にしようという考え、また、全体のボリュームを考慮して通史記述の間に関係史資料を散りばめて編纂してきた。現在の大学の多くは、昭和23年、24年に制度切り替え又は新設という形で生まれた。特に、昭和24年設立の新設又は旧制高等学校や専門学校から昇格した大学が多くある。大正7年の「大学令」に基づく旧制大学は、意外と少ない。だから、旧制時代の「前史」とされる期間の記述が少ないという事情もある。だが、建学の精神を述べるには、前史を軽く考えることができない。大学昇格にあたって変更が加えられていたりすると余計に前史に頁を割く必要が生じる。

そうして、昭和50年代を迎える。そうすると、東京大学が最初に100周年を迎える。我が国最初の大学であるし、次にできる大学は、明治30年創立の京都大学である。私立学校では、慶應義塾が明治23年に「大学部」を設置しているが、制度として認められたわけではない。明治32年まで私立学校は、何の後ろ盾もない私塾というものであったことを忘れてはならない。そもそも我が国最初の教育法規「學制」は、公教育をもって国民皆教育を指向していたのである。政府は、民意を汲み取る形で、私立学校関係の法整備を進めた。

100年という年数は、非常に大きい区切りの意識を生む。それは、「通史編」「資料編」「部局史編」及び「写真集」など分化・多様化へと変化する。1970年代後半、地方公共団体史（市町村史）がブームの真っ最中、早い団体では、編纂2回目を迎えたところもある。そして、編纂形態は、記述に史資料を散りばめた編集方法から「通史編」「資料編」及び「行政分野別編」という編集方式へと多くの団体が移行した。

この流れは、自校史にも及び、最初に『東京大学百年史』がこのかたちで編纂された。

古来、正史が編まれていることは、周知の事実である。もっとも知られているのは、中国の司馬遷『史記』が挙げられる。我が国には、『日本書紀』や『大

日本史料』がある。また、過去を顧みれば、何かめぼしい出来事について、記録を残すという作業がなされている。

「大学史」「沿革史」「自校史」という3つの表現は、同じものである。「沿革史」「自校史」は、ともに寺崎昌男東京大学名誉教授が提唱された呼称である。

「大学史」「沿革史」「自校史」は、年史・史誌という大きな括りの中に、例えば日本史、地方史、行政機関史といった分類があり、中でも教育史の一ジャンルに位置づけられる。そして、大学史は、「学校史」の中の一つである。小学校・中学校・高等学校・幼稚園そして大学の歴史というわけである。

では、「沿革史」に込められた意味は、何であろうか。(学校)沿革史は、大学のみが対象ではない。すべての学校が対象としてあり、各々の設立時から学校史編纂までの間の出来事の列挙羅列を意味している。出来事それぞれに対する評価までは、期待していないと考えられる。評価までできるならば、それに越したことはないのであるから編纂者のレベルで考えればよいことである。言い換えれば、「沿革史」であれば、編纂者の能力に関係なく学校史の編纂が可能でしょうという意味が含まれていることを関係者は、よく認識すべきである。極端であるが、出来事を年ごとに追って記述するというだけでもいいのではないか。

では、「自校史」に込められた意味としては、どう考えるべきであろうか。ここには、学校史編纂に携わるメンバーを考えてみる。編纂者は、当該学校に勤務する教職員であるとか卒業生であることがほとんどである。業者委託方式の編纂は、ここでは考えていない。編纂者が在籍しているにしろ、居たというにしろ当学校関係者に違いない。そうであれば、編纂者は、愛着があるであろうというところから「自分の学校」という意識の発露が「自校史」となって表現されると見るべきであろう。

したがって、「沿革史」「自校史」という用語は、格式張らずに学校史編纂に着手、編纂事業推進が可能でしょう、また編纂は難しいものではありませんよという誘い水と理解しているのである。

手段方法は問わないが、学校史を編纂できない学校は、立派な建学の精神が経営者の執務室に扁額にして飾ってあっても全く絵に描いた餅というものだろう。自校史(学校史)を編纂できない学校は、どこまで実の伴った学校経営、教学運営をしてきたのか怪しいものがある、といえる。大学経営者は、先代から受け継いだ経営方針に対してどう向き合ったのか、時代とともに変遷する学科課程・教育課程にどう対応してきたのか、校地校舎の維持管理などという大きな柱とともに生き延びていく算段をどうやって模索して来たのかを纏めて記録する必要があるのである。それが、首尾よくいったものか不首尾であったかは、後世の判断に任せることになる。広いキャンパスを求めて東京郊外に所在地を求めた東京都心に所在した大学における一時期の流行は、21世紀の少子化問題や通学の不便さから評価が下されることになる。また、生き残りの手段としての学部増設をはじめとした拡大方針も同時に評価される時を迎えている。こうしたことから見ても、自校史編纂を軽視してはならないことがわかるだろう。

「大学史」は、あくまで学校史であるし、教育史の一角に位置するものである。本稿のタイトルを「大学史 沿革史 自校史よもやまばなし」とした所以がここにある。